

シリーズ 私の一冊の本

国際関係学部 松森奈津子 先生

セネカ著 茂手木 元蔵訳 『人生の短さについて』

閲覧室 2階 学生文庫 岩文青/707/1
自由閲覧室 推薦図書 289.3/W 73

岩波書店 出版

小さいころから、学校の勉強は嫌いだったが、読書は好きだった。『車輪の下』、『罪と罰』、聖書、『論語』、『三国志演義』、『芋粥』、『安土往還記』、『竜馬がゆく』……人生の節目で影響を受けた本は多い。

なかでも、標記の図書は、職業選択に決定的な影響を及ぼしたという点で、印象に残っている。まだ新任講師であった恩師の「政治思想史」を履修したのをきっかけに、漠然と研究者の道に進みたいと思うようになっていたが、かなり迷ってもいた。長年の勉強嫌いがたたり、同期と比べてかなりデキが悪い。くわえて、フツーに就職すれば得られるはずの多くのもの——とくに、安定した生活——をあきらめ、将来を棒にふる大きなリスクを背負うのが、いやだった。

そんなとき、自分にとって一番大切なものは何かということを再考させてくれたのが、この本である。いわく、人生は短い。それは、自分を取り巻く環境ばかりに注意がいきってしまい、自分自身の生を生きしていないからである。地位や、金や、他人の評価を気にかけて、死ぬその瞬間まで、他人のために、時間を浪費しているからである。使い方を知れば、人生は長い。毎日を最後の一日と考え、貪欲さや野心を離れて自分に誠実に生きる人こそ、幸福である。

もちろん、ストア主義に共通するある種の「内向き」さが鼻につかないわけでもなかった。けれども、それ以上に、瑣末的なことにこだわって、どのように生き、死にたいのかを直視しなかった自分を指摘されたように感じたのである。生活の安定も、社会的地位も、他人からの評価も、いらぬ。優れた研究を残し、それがいつかだれか一人にでも何らかの影響を与えられるならば。

こうして、若さゆえの「ストイック」さで、アカデミシャンをめざすことを決意した。いまでも、迷いが生じたときには時々、この決断を後押しした本書を手取るのである。